

◎食のリスクコミュニケーション・フォーラム 2020 (4回シリーズ)

『消費者市民のリスクリテラシー向上を目指したリスクコミとは』

第3回テーマ：『低線量放射線被ばくのリスクコミ～福島復興支援のために～』

【開催日】 2020年9月26日(土) 13:00～17:50 (最大延長：18:00)

【開催場所】 オンライン配信となります (Google Meet)

\*会場の東京大学農学部中島董一郎記念ホールへの入構不可のため。

【主催】 NPO 法人食の安全と安心を科学する会 (SFSS)

【後援】 消費者庁、東京大学大学院農学生命科学研究科食の安全研究センター

【協賛】 日本生活協同組合連合会、一般社団法人食品品質プロフェッショナルズ、  
東京サラヤ株式会社

【対象】 食品関連行政の担当者、食品事業者の広報・お客様相談・品質保証担当、リスク研究者、  
マスメディア、消費者団体・市民団体、など

【定員】 先着 80名 (オンライン対応のみ)

【講演会参加費】 3,000円/回 (事前に銀行振込をお願いいたします)

\*SFSS 会員、後援団体・協賛企業 (口数により人数制限)、メディア (取材の場合) は無料

【参加申込み】 <https://forms.gle/ovqe7YNemD3oZC6CA> (9月24日で受付終了予定)

【お問い合わせ】 SFSS 事務局まで ([info@nposfss.com](mailto:info@nposfss.com))

【本フォーラムの主旨】

毎回、食のリスクに詳しい有識者をお迎えし、講師3名 (Q&A 含み 60分) + 総合討論 (90分) :  
13:00～17:50 の構成とします。総合討論では、消費者市民の安全・安心につながる食のリスクコミ  
ュニケーションのあり方について、参加者の皆様からの質問に講師が回答する形で議論します。

【事故防止対策等】 フォーラム開催に際して、事故防止及び公衆衛生の措置に留意し、十分に講じま  
す。特に、今般の新型コロナウイルスに関しては、十分な感染症対策等を講じることとします。

【各講師のご紹介&講演要旨】

① 伊藤 浩志 (学術博士)

『住民の放射線不安は過剰なのか：安全と安心の関係を見直そう』

「安全は科学の問題で、安心は心の問題。科学知識を身につければ、過剰な不安は解消できる」と考えられてきた。リスク認知研究により、素人のリスク認知はバイアスを避けられず、科学的なリスクの見積もりより、過剰になりがちなのが示されているからだ。ところが、脳科学などの進展で、文化や生物種を超えて常に観察される一定の偏りには、環境に適応し、種の保存に必要な合理性があることが分かってきた。「過剰な不安」と見られてきた素人のリスク認知の背後にある生物学的合理性を検証し、安全・安心二元論の限界を明らかにする。新型コロナウイルス感染症にも関わる普遍的な問題である。その上で、新たなリスク論を提案したい。

② 瀬谷 健介 (BuzzFeed Japan)

『原発問題への関心が低下した今、メディアが果たすべき役割は』

福島第一原発で、高濃度の放射性物質を含んだ「汚染水」に、浄化処理を施した「処理水」が日々生まれ続け、タンク群が敷地の一部を埋め尽くすように広がっています。東電は、敷地の問題から2022年夏が保管のタイムリミットだとしています。経済産業省の有識者会議が2月、「海か大気への放出が現実的」とする報告書をまとめました。ですが、政府は最終的にどうするか判断を示せていません。地元でも賛成の声がある一方、風評被害を懸念して反対し、保管継続を求める動きがあるからです。報道機関の1人の記者として、原発構内や関係者、元環境大臣などへの取材を通し、何を知り、何を考えたかを報告します。

③ 多田順一郎 (放射線安全フォーラム)

『放射線リスクミはなぜ失敗したのか』:

言い古されたことですが、安全を理解させることはできても、安心してはもらえません。行政は、すでに安全だった食品基準をさらに引き下げて安心を提供しようとし、案の定失敗しました。食品の放射能汚染に関する人々の認識を混乱させた最大の要因は、科学的な判断ではなく、ポピュリズムへの妥協に基づいて基準を作ってしまったことにあります。ただしその背景には、1950年代に作られた放射線防護の基本的な考え方を、無批判に墨守してきた学界の姿勢がありました。とくに、放射線防護体系が用いてきた「どれほど僅かな放射線曝露にも健康リスクがある」という慎重な前提は、さまざまな誤解の根源となっています。

以 上